



# 今日からできる 『社会貢献』

誰もが必要とされる時代

最終回 (株)NTTデータ経営研究所  
村橋 保春

## 必要とされる幸せ

誰もが学校時代にお世話になったチヨーク。難しい問題の答えを黒板にチヨークで書き示し意気揚々と席に戻る優等生。夜更かしがたたり白河夜船を決め込んだ生徒に飛んでくる先生からの愛のチヨーク。日直は授業の前にチヨークが揃っているか必ず確認していた。

日本理化学工業株式会社はチヨーク製造の会社である。ダストレスチヨークなど環境に適応した製品とともに、知的障害を持つ人たちが多く働く会社として有名である。同社では全社員数74名のうち55名の知的障害を持つ人たちががんばって働いている。

残念ながら知的障害を持つ人たちは、生産性、効率性の高い働き方ができない。経営効率の観点に立てば、こうした障害を持つ人たちを積極的に雇い入れるという経営判断はしにくい。同社はなぜ障害を持つ人たちを雇い入れるのだ

ろうか。

同社は福祉施設から、社会的経験を積むため障害を持つ人たちが働く機会を与えてほしいと頼まれ試験的に2名雇用する。熱心に働く姿を見て何が彼らをそこまでがんばらせるのかを考えていると、お坊さんから次のとおり話を聞いた。

『人間の究極の幸せは、一つは愛されること、二つ目はほめられること、三つ目は人の役に立つこと、四つ目は人に必要とされることの四つである。福祉施設で大事に面倒をみてもらうことは「愛されること」のみの幸せである。会社で働くことにより「ほめられること」「人の役に立つこと」「人に必要とされること」の三つの幸せを得ることができる。会社はこうした幸せを提供する大切な役割を担っている。』同社の経営者はこの話に深く感銘し、現在の会社のあり方へと大きく舵取りした。

マズローの欲求5段階説と照らし合わせると「人間の究極の幸せ」

は最上位の欲求である「自己実現の欲求」にあたり、そのなかでも「人に必要とされること」はもっとも重要な幸せであると考えられる。

人はなぜ社会貢献に努めるのか。困っている人を助けたい、がんばっている人を応援したい、そうした純粋な気持ちに突き動かされ、社会貢献に関わる。では、誰のために社会貢献に努めるのか。困っている人、がんばっている人、のために努めるのか。日本理化学工業の話を知ると、人は「人に必要とされること」を強く実感できる幸せのために社会貢献していることが分かる。社会貢献は、実は自分自身のために行っているのである。

どのような「必要」がそこにあるのか

社会貢献は「人に必要とされること」を行いその幸せを自分自身に必要とされるかを謙虚に考える

ことが求められる。つまり、誰のどのような「必要」に対して応えていくのかしっかり考える。

人は厳しい局面に際し、その厳しさから逃れたいと考えるばかりではない。その厳しさを努力して克服したいと考える場合もある。

その厳しさを克服しないと、より充実した生き方ができない場合もある。日本理化学工業に勤める知的障害の人たちも困難を乗り越えがんばって仕事する機会を得ることでより大きな幸せをつかんでいる。

デザイナーズセンター「夢のみずうみ村」は高齢者のリハビリセンターである。バリアフリーならぬ「バリアアリー（有り）」として、施設内にあえて坂や段差を設けている。バリアを高齢者自身の努力で克服することにより、回復した自分自身を自覚する。施設内で運営する教室には「師範・師範代制度」があり、たとえば片腕が麻痺した方が片腕での料理を教える機会を設けている。師範や師範

代となった人は大きな喜びを持って、センターを訪れる人たちに料理を伝え、学んだお年寄りも自らができる範囲で家族の役に立つことができる。このリハビリセンターでは過度な介護による状態の悪化を防ぐばかりでなく、「人に必要とされること」の幸せまで得ることができるのである。

少年野球クラブの監督から、チームが一段と強くなる局面について話を聞いたことがある。強くなる局面とは、子どもたちが自発的にミーティングを行うことだとい

いう。監督から教えられ実行するばかりでなく、子どもたち自らがどのように戦えば勝利できるのかを経験を踏まえて考え出すこと、つまり「気付く」ことで格段に動きが良くなるのである。教えるのは簡単である。気付くこととは、自らが求められていること、必要とされていることを見つけ出すことであり、見つけ出した「必要」をしつかり実現することがいっその幸せにつながる。子どもたち

が気付くまでじっと我慢し、子どもたちが自発的に動き出した時こそ、監督冥利に尽きるとその監督は語る。

誰が必要とされる時代  
— 社会貢献の時代 —

本連載を始めるにあたり、社会貢献のあり方をいろいろな事例を踏まえてご案内することを想定していた。障害者支援、子育て支援、「婚活」応援、文化応援、安全安心応援、食育応援、スポーツ応援のテーマについて現地取材などを通じて、社会貢献に関わる人たちがどのように取り組んでいるのかについてお伝えしてきた。そうした事例から、これだったら私も取り組めるといった気持ちを高めてもらえればありがたいと考えていた。

東日本大震災とその後続く原発問題により、私自身いっそう深く考えなければならぬと自省することとなる。震災後の東北の方々は、自らも被災しているながら

より厳しい状況に置かれている人々に対して心から手を差し伸べている。被災者として助けを求めたとしても誰もがそれを認めるのに、誰かの役に立ちたい、誰かの必要に応えたいとがんばる。

「震災婚」という言葉が生まれた。家族や地域の束縛から逃れ自由に生きる気楽さから独身を通してきた人たちが、大震災により家族や地域の中にいることの大切さを痛感し結婚に踏み切り始めている。多くの日本人にとって人生観が根本的に変わってきている。

これからの世の中は、誰もが必要とされる時代になった。世の中の中心にあるものは生産性や効率性といった競争ではなく、協調性や一体性といった共存である。そこにはお互いを思いやり慈しみあう「社会貢献」が基軸に置かれる。自分自身が必要とされることを見つけ出し、実行する、そしてこの上ない幸せを得る。心豊かな時代の扉が開かれた。われわれは新たな時代を突き進む責任がある。